

東京天文台百年

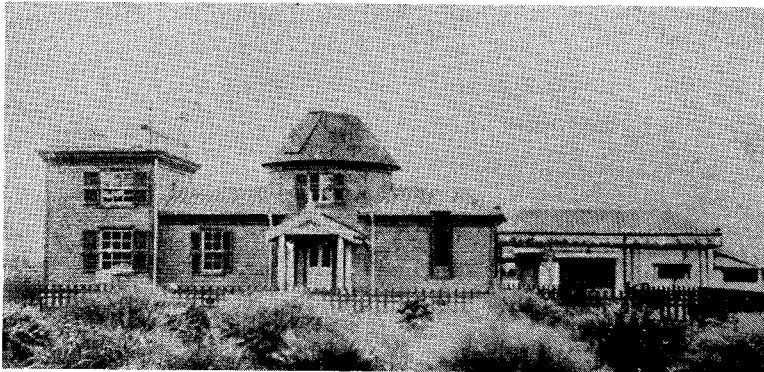
飯島重孝*

東京天文台は明治11年(1878年)に東京大学理学部の観象台として本郷において発足した。明治15年(1882年)にその気象部門を分離して天象台と改称、さらに明治21年(1888年)に旧内務省および海軍省の天文関係の業務を統合して東京天文台と改称し、麻布飯倉に移転した。大正10年(1921年)には天文台官制が制定され、理学部付属から大学付置へとかわり、大正13年(1924年)に三鷹へ移転して現在に至っている。

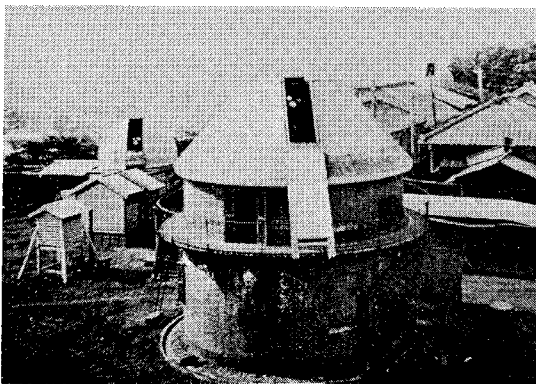
三鷹移転後については、昭和20年(1945年)の第二

* 東京天文台 Shigetaka Iijima: Centenary of the Tokyo Astronomical Observatory

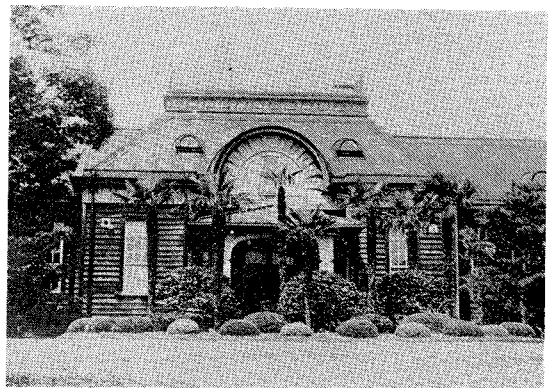
次世界大戦の直後、火災により本館を焼失して貴重な記録や研究機器を失ったが、この損失にもめげず急速に復活して戦前に勝る研究活動が続けられるようになった。昭和23年(1948年)には測地学委員会三鷹国際報時所と統合、昭和24年(1949年)には国立学校設置法の公布により東京大学の附置研究所となり、ついで昭和28年(1953年)には新制大学院の発足により大学院教育に参加、理学系研究科の天文学課程を担当することとなった。一方、観測施設の拡充計画により、昭和24年(1949年)にに乗鞍コロナ観測所、昭和35年(1960年)には岡山天体物理観測所、昭和37年(1962年)には堂平観測所、



本郷時代



麻布時代



三鷹時代初期

昭和40年(1965年)には人工衛星国内計算施設, 昭和44年(1969年)には野辺山太陽電波観測所, 昭和49年(1974年)には木曾観測所, 昭和53年(1978年)には太陽活動世界資料解析センターならびに野辺山宇宙電波観測所が設置され, 現在では構内, 構外合わせ合計8施設を数えるに至っている。

現在の東京天文台は, 天文時, 子午線, 天体掃索, 太陽電波, 太陽物理, 測光, 恒星分類, 人工天体運動, 宇宙電波, 銀河系の10研究部と前述の8施設のほか天文計算, 図書の2室および事務部から構成され, 位置天文学, 天体物理学ならびに電波天文学等の研究観測業務を行うと共に, 暦書の編成, 中央標準時の決定と現示等の業務を担っている。こうして東京天文台は200名余りの台員の努力と台外の諸先輩, 官界, 学会, 業界関係各分野の方々の御協力を得て, 国内唯一の総合天文台として活発な活動を続ける一方, 国際的にも多くの貢献を重ね,

斯界における指導的立場を確保しつつある。昭和53年(1978年)は天文台創設の明治11年(1878年)から数えて丁度100周年に当る。

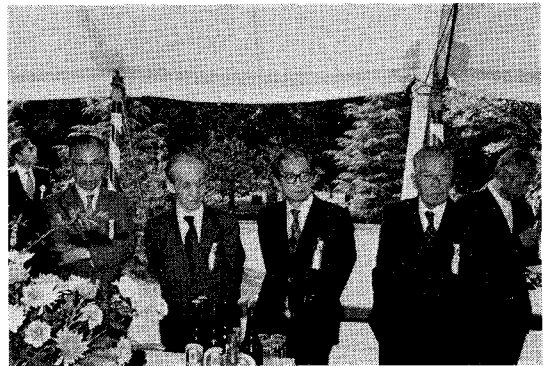
東京天文台百年記念式典は昭和53年11月1日に, 台内外関係者約250名参列のもとに行われ, その後簡単な祝宴が同天文台中庭で催された。同日郵政省より東京天文台百年記念の切手が発行された。

“東京大学東京天文台の百年”という本が編さんされ, この100年間の歩みをアルバム風に示している。関係者および関係諸機関の図書室には寄贈される予定である。

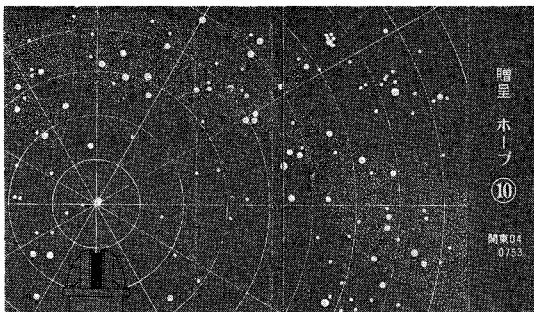
また天文月報71巻9月号に報じた通り, 百年記念事業の一環としてIAUシンポジウムNo. 81“太陽系の力学”を海上保安庁水路部と協同して開催した。



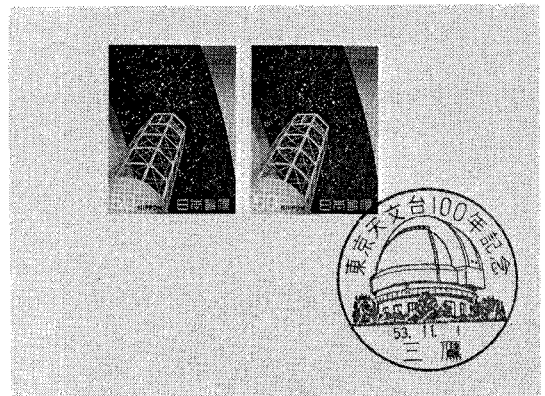
挨拶する末元天文台長



祝宴での歓談



記念たばこ (ホープ)
図案は東京天文台の宮本文子氏と2~3名の台員の協力による。



東京天文台百年記念の切手
意匠: 反射望遠鏡と星座(オリオン座)
原画作者 武荒勸嗣氏